山口学芸研究 第10号 2019年 pp.99～115

Lewis Carroll の脚韻語構造：規則順守から逸脱へ

下笠　徳次

---- Lewis Carroll: The Structure of Rhyme Words: From Regularities to Irregularities ---

Tokuji SHIMOGASA

Lewis Carroll は『不思議の国のアリス』の発端となった、あの有名な「献呈の詩」“All in the golden afternoon”を初め、多くの詩を遺している。あらゆるパタンの詩形を駆使している。最も頻度の高いのは a-b-a-b という１連４行から成るもので、以下、a-a-a 詩形、a-a 詩形、a-b-a-b-c-c 詩形、a-b-a-b-c-d-c-d 詩形、a-b-a-b-a-b 詩形、a-b-a-a-b 詩形、a-b-c-b-d-b 詩形、a-a-b-b-c-c-d-d-e-e-f-f 詩形、a-a-b-b 詩形、a-b-c-b 詩形、a-a-b-c-c-b 詩形；（以下各１つのみ）a-a-a-a-a-a 詩形、a-b-b-a 詩形、a-a-b-b-c-c-c 詩形、a-a-b-c 詩形、a-a-a-a-b-b-b-b 詩形、a-a-a-b-a-b 詩形、a-a-a-b-b 詩形、a-b-a-b-a-b 詩形、a-b-a-b-c-c-c 詩形、a-b-a-b-e-d-e-d 詩形、a-b-a-b-c-c-d-d 詩形、a-b-c-b-b-b 詩形等が見られる。論理学の知識が各々の詩の中に活かされているのを実証することにする。

多くの詩が複雑に紛れ込んでいることもあり正確な数を明示すことはできない。同一の詩の中で突然、詩形が変化してくることもある。Carroll の想いが縦横無尽に働いていることになるのではないか。こうして Carroll は様々な詩の「実験」をしていると言ってよい。但し、大事なことは詩形の相違により脚韻語の選択に特徴が見られるということには必ずしもならない。これから規則に合った脚韻から次第にこの規則から外れる例をより複雑になる順に見てゆく。

先ずは作詩法に即した「黄金の午後」は避けて通れない。a-b-c-b-d-b という６行１連から成り、Carroll の数ある詩の中で最も美しいという定評のあるものである。抒情性に乏しい大半の詩の中にあって際立って美しいものとなっている。それは丁度、アイシス川の緩やかな流れそのものである。恐らく Carroll はこの詩にかなりの想いを込めて詠んだのではなかろうか。

All in the Golden afternoon[1)]（a）
　　Full leisurely we gl***ide***;（b）
For both our oars, with little skill,（c）
　　By little Arms are pl***ied***,（b）
While little hands make vain pretense（d）
　　Our wanderings to g***uide***.（b）　　（‘Dedication’ 1 – 6）

b-line が主となっている。序にすべての連の b-line は次のようになっている：

weather: feather: together, beg**in it**: **in it**: min**ute**, pursue: new: true, dry: by: cry,
one: done: sun, hand: band: land である。第１連の３語:‘glide’, ‘plied’, ‘guide’, そして ‘pursue’ 以外はすべて本来語＝ゲルマン系の語となっている。

次にオーソドックスな押韻の例として a-b-a-b-a-b 型の詩を観察する：
中英語風（懐古風）の詩[2)]：‘Ye carpette knyghte’ で、

I have a horse --- a ryghte goode horse ---（a）
Ne doe I envye th**ose**（b）
who scoure ye playne yn headye course（a）
Tyll soddayne on theyre n**ose**（b）
They lyghte wyth unexpected force（a）
Yt ys --- a horse of cl**othes**.（b）　　（1 – 6）

b-line は ‘those: nose: clothes’ が押韻している。従って ‘clothes’ の音は /klouz/ となる。Carroll の詩全体を通じて /klouðz/ は見られない。

３行１連から成る単純な a-a-a 型のものの１つに ‘The Path of Roses’ がある。大半はいわゆる無韻詩となっているが、途中に３行で１連、合計８連から成る詩がある。この８連のうち６連の脚韻構造は：race: place: face, right: night: fight, strong: long: throng, grave: brave: wave, fair: air: prayer, go: slow: below という英詩の伝統に基づく規則に合ったもので、次の２連だけが問題となる：

“Still, with a dim and glazing **eye**,（a）
To watch the tide of victor***y***,（a）
To hear in death the battle-cr**y**:（a）
（第５, ６連省略）
“Where no vain marble mocker**y**（a）
Insults with loud and boastful l***ie***（a）
The simple soldier’s memor**y**:（a）

上記の中で、‘victor***y***’ と ‘l***ie***’ はそれぞれの rhyme fellows に合わせると /viktorai/, /li:/ となる。しかしながら、そこまで無理して読む必要はない。即ち、「視覚韻」(eye rhyme）と理解する方がいい。これがいかに多いことか！

The sister raised her beaming **eye**（a）
And looked on him indignantl***y***（a）

And sternly answered, “Only tr**y**!” (a)　　‘Brothers and Sisters’

ここでは‘indignantly’は他の rhyme fellows に合わせると / - lai/ となるところだが視覚韻として捉えた方がいい。なお、語尾が‘-ly’で終わる副詞同士はしばしばお互いに押韻する傾向にある[3)]。

Her soul is flint, and what am **I**? (a)
Scorch’t by her fierce, relentless **eye**, (a)
Nothingness is my destin***y***! (a)　　‘The Spasmodic or German School’

ここでは後半に再度、視覚韻が見られる。‘destiny’や‘memory’がしばしば語末が /-ai/ となる rhyme fellow と押韻するがやはり視覚韻の範疇に入るであろう。

この言語現象の代表的な例の１つは『鏡の国のアリス』の最後に置かれている有名な acrostic[4)] の最初のスタンザに見られる：

A boat, beneath a sunny sk**y** (a)
Lingering onward dreamil***y*** (a)
In an evening of Jul**y** ---- (a)

2 行目の脚韻語は /dri-milai/ と読みたくなるが、やはり視覚韻と捉えた方がよかろう。3 行目は明らかに短か過ぎて所謂「字足らず」となっているが、押韻を優先するために尻切れトンボになっている。このような具体例を Carroll の詩の中に数多く見出すことができる。このような視覚韻は Carroll の数多くの詩に見られる。具体例のみを列挙すると次のようになる：

wood : m**ood**, st**ood**: gratitude: rude, g**one**: John: on, despair: hair: w**ere**, wind: intertwined: m**ind**, hair: carrier, eye: histor**y**, sky: lie: greener**y**, roam: c**ome**: home, eye: victor**y**: battle-cry, mockery: lie: memor**y**, eye: lustil**y**, buy: speedily, eye: indignantl**y**: try, maid: said, affair: were, I: eye: destin**y**, crooky: bouq**uet**: Sukie, by: nobilit**y**, Whitb**y**: by, good: bl**ood**, live: sieve, even: heaven, good: wood: bl**ood**, cry: agon**y**, Hor**ace**: us, eye: ecstas**y**, supplies: quantit**ies**, crye: companye, come: axiom, column: solemn, etc.

mood, stood, mind, blood はこうしてしばしば正確な押韻を壊す挿入となる。
‘wood’: ‘mood’は中英詩以来、継続的に使われている popular な押韻である。
参考までに：wood: mood: stood: blood 等は中英詩では同じ音価であった。そのことを Carroll は当然、理解していたであろう。また、‘-y’で終わる名詞もこの種の押韻では問題を提起してくれる。上記の用例中、‘bouquet’は /(bu-)kei/ なので、2 つの /-ki:/ とは合わない。Whitby や Horace のような固有名は rhyme fellow との関係で不完全な発音を強いられることになる、もし

視覚韻として捉えるのでなければ。視覚韻は中英詩以降、多くの詩人の詩に見ることができる極めてpopularが言語現象と言える。‘live’: ‘sieve’, ‘even’: ‘heaven’ なども popular な視覚韻である。‘come: axiom’（Phantasmagoria）は一見分かり辛いが、やはり視覚韻である。なお、‘were’ は /-eə/ で終わる語としばしば押韻することになる。

次は単語そのものの発音が問題となるのではなく、構造上の問題となる：

The little fishes’ answer w**as**（a）
‘We cannot do it, Sir, bec**ause** ---（a）　‘Humpty Dumpty’ 13 – 14

And he was very proud and st**iff**:（a）
He said ‘I’d go and wake them, **if** ---（a）‘Humpty Dumpty’ 33 – 34

And when I found the door was sh**ut**,（a）
I tried to turn the handle, b**ut** ---（a）　‘Humpty Dumpty’ 39 – 40

上記 3 例においては脚韻の相手（それぞれ ‘was’, ‘stiff’, ‘shut’）に合わせるため、それぞれ接続詞 ‘because’, ‘if’, ‘but’ が行末に来ている。そして ‘because’ の ‘---ause’ はここでは ‘was’ に合わせるため、/--- əz/ という弱音となる。3 番目の例では長さから言って、もう 1 語必要なので明らかに無理に ‘but’ で止めていることになる。これと同一の現象（‘because’ : ‘was’）は他にも数例見られる（‘Phantasmagoria’, ‘The Hunting of the Snark’, Fit the First）。接続詞止めというのは奇異な感じがする。

このような興味深い、あるいは楽しい押韻は高品質の詩には見られない。Carroll はこの種の言語遊戯を楽しんでいるように思われる。明らかに意図的で、中英詩にもときたま見られる。所謂「へぼ詩」(doggerel)[5] と言われるジャンルに見られる現象である。キャロルの詩の殆どにおいて抒情性は皆無である。

キャロルの ‘a-a-a’ 型詩行の詩において、‘again’ が ‘---en’ words と押韻する例がしばしば見られる。その一例を：

Where lay two worn decrepit m**en**,（a）
The fictions of a lawyer’s p**en**,（a）
Who never more might breathe ag***ain***.（a）　‘The Palace of Humbug’

ここでは ‘again’ は /agen/ という、方言に見られる発音が当て嵌まる。有名な類例をもう 1 つ呈示すると：

‘Humpty Dumpty sat on a wall:（a）
Humpty Dumpty had a great fall.（a）
All the King’s horses and all the King’s m**en**（b）
Couldn’t put Humpty Dumpty in his place ag**ain**.（b）

この種の押韻はほかの詩形の詩にも見られる（‘The Banker’s Fate’, ‘Upon the Lonely Moor’）。この ‘again’ の異形 ‘agen’ も Carroll は使っている：

O when he cam’ the parlour **in**,（a）
A woeful man was he！（b）
“And dinna ye ken your lover ag***en***,（a）
Sae well that loveth thee？”（b）　　‘The Lang Coortin’

非標準語の詩なので明らかに ‘in : agen’ という押韻にも無理がきている。アングロサクソン系の語 ‘again’ は古英語の時代より今日に至るまで種々様々な語形で使われてきている。OED に「詩人は ‘agen’ も用い、17 - 19 世紀に Midland で用いられ、発音も /agein/ のほかに /agen/ もあり」[6]、とある。従って、Carroll に見られる ‘men’ / ‘ten’ / ‘pen’ : ‘again’ は正確に押韻していると理解してよい。

尚、‘again’ は ‘then’ その他の多くのゲルマン系の語ともしばしば押韻する。当時、2 つの発音を Carroll は実際に耳にしていたものと推察可能である。

他にもいろいろな詩形が混在しているものも少なくない。途中から切れ目のない無韻詩（blank verse）になっているものもある。Carroll はいろいろな詩形を試していると言えよう。殆どの詩において抒情性（lyricism）は見られず、散文的な内容を詩の形に変えているに過ぎないと言ってもいい内容のものも明らかにある。唯一語で完全に一行を成す場合もある（‘Enthusiastic**ally**’: … sally: … shilly-shally’, ‘Poeta Fit, Non Nascitur’）。ラテン語を持ってくる場合もある。本来は分節することのできない語を敢えて 2 行に分けることもある。いわゆる「行跨り」（run-on line）の技巧も少なくない。その 2 語でさえも実に巧妙に仕組んでいる場合もある。さらに英語とフランス語、イタリア語あるいはラテン語との組み合わせ等も見られる。数字でさえも脚韻語として読ませる工夫を読者に期待する個所もある。言葉に敏感でないとすぐには気づかないような押韻形式も見られる。多少「無理かな」と思えるような押韻も頻用している。本格的なロマン派詩人達（Wordsworth, Byron, Keats, Tennyson, etc.）とは一線を画する詩人と言える。高橋康也東大名誉教授の言われる「反詩人」としての Carroll の姿であり、抒情性を込めることを最初から意図していなかったのではないか。

以上の内容に当てはまる脚韻の例を順次、呈示していくことにする：

1）　The day was wet, the rain fell souse（a）

Like jars of strawberry jam, **a** （b）
Sound was heard in the old henhouse,（a）
A beating of a hamm**er**.（b）　　'Lays of Sorrow', No.1

a : hamm***er*** という押韻に留意されたい。/a/ : /ə-/ であるので不規則韻であるが、これはいわゆる詩的許容（poetic license）の範囲内である。この言語現象がこれから幾度も出てくることになる。ここは行跨りで 'a sound' となり意味を成すが、敢えて不定冠詞だけを行末に遺している。大胆極まる操作である。

同じ現象が別の詩に見られる：

I was following behind **her**（a）
When, if you recollect, I（b）
Merely ran back to find **a**（a）
Gold pin for my neck-tie.（b）　　'Coronach'

'h***er*** : ***a***' も大胆な押韻となっている。'a' と 'gold'（pin）が行跨りになっている。

"O Mother!" said they, "Guildford's not **a**（a）
Nice place for the winter, that's flat.（b）
If you know any country that's hott**er**,（a）
Please take us to that!"（b）　　'Three Children'

直前の押韻と同じ考えでよろしい。/a/ : /ə-/ で許容範囲内である。「Guildford の冬は住むのに適切ではない、もっと温かい所があれば、そこに連れて行って欲しい」という内容で抒情性は全くない。

First in age, but not in merit,（a）
Stands the Rect'ry Magazine:（b）
All its wit thou dost inherit,（a）
Though the Comet came between.（b）
Novelty was in its f**avour**,（c）
And mellifluous its lays,（d）
All, with eager plaudits, g**ave a**（c）
Vote of honour in its praise.（d）　　'The Poet's Farewell' 211- 28

/feivə:/ : /geivə/ は微妙に語末の長さに長短があるが見事な押韻となっている。ここでも 'a Vote' が行跨りになっている。

これから数例挙げる押韻は就中、注目に値するかも知れない：

"*I've* tried it, and can only say　(a)
　I'm sure you couldn't do it, **e-**（b）
ven if you practiced night and day,（a）
Unless you have a turn that way,（a）
　And natural ingenui**ty**.（b）　　'*Phantasmagoria'*: Cant IV

a-b-a-a-b 詩形において b-line が問題となる。本来ならば分節できない 'even' を無理に分けることによって成立する押韻となっている。よく観察しないと看過されることになる。Carroll の究極の言語的遊びと言えよう。

"Last, as to the arrangement:（a）
　Your reader, you should show **him**,（b）
Must take what information he（c）
　Can get, and look for no **im-**（b）
mature disclosure of the drift（d）
　And purpose of your poe**m**（b）　　'Poeta Fit, Non Nascitur'

a-b-c-b-d-b 詩形で、やはり b-line が問題となる。ここでも 'immature' を Carroll は敢えて分節して行跨り（run-on line）にして、苦しい押韻を実験している。

行跨りはまだ見られる：

"And in summer", said sorrowful **Mary**,（a）
　"We shall hear the shrill scream of the train（b）
That will bring that dear writer of **fairy**-（a）
　tales hither again."（b）　　'Three Children'

a-b-a-b 詩形において今度は a-line が問題となる。Mary と押韻させるために本来 1 語であるべき 'fairytales' を敢えて分節している。

With eager eyes my reader cries,（a）
　"Your friend must be indeed a **val-**（b）
-uable child, so sweet, so mild！（c）
　What do you call her？" "May For **shall**."（b）　　'Madrigal'

なお、この詩はMiss May Forshallに宛てたmadrigalでa-b-c-b詩行になっていて、3連で終わる。各連の最後はそれぞれ“‘May’ for ‘shall’!”, “‘May’ for ‘shall’”, “May for shall”と技巧を凝らしている。ここでは‘shall’と押韻させるために‘valuable’を敢えて分節して行跨りにしている。

“Compared with her, the rest”, she cired, (a)
“Are just like two or three **um-** (b)
“brellas standing side by side! (a)
“Oh, gem of ------- (b) ‘The Lyceum’

ここでは‘umbrellas’が分節され、行跨りになっている。問題は最終行の脚韻語は‘~**um**’になるはずで、Carrollは「すべて」の意のラテン語‘omnium’を入れたかったけど、それが咄嗟に思い浮かばなかったのかも。「〜という宝石」(同格として理解して) ならば120もの宝石があり、‘-um’で終わるのに‘corundum’(鋼玉) がある。Carrollは恐らくこの専門の鉱石名を挙げられたかも知れない。美しい女性を賛美する詩なので「すべての中で最高の女性」ということを言いたい、ということだけは確かである。尚、ラテン語でなら‘sucinum’(琥珀)、‘crystallum’(水晶)、‘aurum’(金)、‘argentum’(銀)、‘cuprum’(銅)、‘platinum’(白金) 等を挙げることができる。

同様の技巧を凝らした詩行を続けることにする：

“The year when boilers froze and **ket-** (a)
tles crystallised the fender (b)
The natal day of Bosanquet (a)
Dawned on us in its splendor. (b)

For those who wear wool hosen **cat-** (a)
ching colds a thing unheard of (b)
But this great maxim Bosanquet (a)
Would not believe a word of. (b)

When Frenchmen say ‘sare, no zank’ **et-** (a)
iquette suggests the answer (b)
‘A zoughtless, zankless Bosanquet (a)
Would be more zief zan man Sir.’ (b) ‘Winter Birthday’

‘kettles’, ‘catching’, ‘etiquette’を連続して行跨りにしている。音を優先させるためのCarrollの苦肉の策である。上記では‘Bosanquet’の語尾の音が2通りになっている。真ん中の連では‘catching’が優先されるので /bosankæt/ となる。

When the grave College Don, full of lore **inexpressi-** (a)
ble, puts it all by, and is forced to confess he (a)
Can think but of Agnes and Evey [and Jessie.] (a)　　'Anagrammatic Sonnet'

破格の長さの a-a-a 型の詩で、やはり 1 語を 2 行に分けている。'he' と 'Jessie' と押韻させるための苦肉の策である。しかも [and Jessie] は本来は言及しなくてもいい名前かも知れないが、押韻のために付け足した感が否めない。さらに 'he' と 'Jessie' が音的には優先されるので、'inexpressi-' は第一義的には無理がくる。

以上の例以上に人口に膾炙して有名な例は次であろう：

"Beautiful Soup! Who cares for fish, (a)
Game, or any other dish? (a)
Who would not give all else for two **p** (b)
ennyworth only of beautiful Soup? (b)　　'The Mock Turtle's Song'
.....

大胆そのものの分節と言えよう。今度は 'p' のあとにハイフンがないが、これは rhyme fellow の 'Soup' と瞬時に押韻することを分からせる意図からであろう。

Carroll は英単語とラテン語を押韻させることも少なくない：

"And what is a Sensation, (a)
Grandfather, tell me, pr**ay**? (b)
I think I never heard the word (c)
So used before to-d**ay**: (b)
Be kind enough to mention one (d)
'Exempli grati**â**'." (b)　　'Poeta Fit, Non Nascitur'

'exempli gratiâ' (=for example) の中の 'gratiâ' はラテン語としての発音は /gra-tia-/ であるが、ここでは 'pray' : 'day' に合わせて 'gra-ti***ei***' と読ませている。手が込んでいる。

"One thousand pounds per ann**um** (a)
Is not so bad a figure, c**ome**! (a)
Cried Tottles. "And I tell you, flat. (b)
A man may marry well on that! (b)　　'What Tottles Meant'

'per annum' = 'annually'。イギリスではラテン語というより、むしろ限りなく「英語化」された、見慣れた語句であるので Carroll としても自然に出てくる脚韻句であろう。

次の例も見てみたい：

“Now try your hand, ere Fancy （a）
Have lost its present gl**ow** ---”（b）
“And then”, his grandson added,（c）
“We’ll publish it, you kn**ow**:（b）
Green cloth --- gold-lettered at the back ---（d）
In duodecim**o**!”（b）　　‘Poeta Fit, Non Nascitur’

‘duodecimo’は「十二分の一の形で」というラテン語で、すでに英語化されてはいるが、やはりラテン語そのものである。「十二折版」(= twelvemo）という四六版の本・紙・ページのことである。2 冊の『アリス』本の出版に関して出版社に自らいろいろと注文をつけた Carroll だけに、このような専門語を駆使するのも首肯できる。

And think you that I should be d**umb**,（a）
And full dolorum omni**um**,（a）
Expecting when you choose to c**ome**（a）
And share my dinner?（b）
At other times be sour and gl**um**（a）
And daily thinner?（b）　　‘A Valentine’

a-a-a-b-a-b というやや珍しい詩形で、‘dolorum omnium’（= in all sorrow）の中の‘omonium’を「英語的」に /omniam/ と読ませていることになる。

イタリア語と英語の組み合わせの例も見られる：

The night’s performance was “King John”（a）
“It’s dull”, She wept, “and so-**so**!”（b）
Awhile I let her tears flow on,（a）
She said they soothed her woe **so**!（b）
At length the curtain rose upon（a）
“Bombastes Furio**so**”.（b）　　‘Melancholetta’

a-b-a-b-a-b 詩形で、最終行の‘Furioso’は「怒った」の意のイタリア語で、発音は /-so/ あるいは /-zo/ であるので、ここでは発音は英語化されていることになる。

さて、これからは at random に「興味深い」押韻の例を呈示することにする：

“O ever alack that ye sent it back,（a）
It was written sae clerkly and w**ell**！（b）
Now the message it brought, and the boon that it sought.（c）
I must even say it mys**el**’.”（b）　　‘The Lang Coortin’

a-b-c-b の詩形で、b-line が押韻しなければならないので本来の形‘myself’の最後の‘-f’を思い切って削除している。意味はすぐ分かるが、苦心の策と言えよう。

次の例：‘ter’は殊に注目に値しよう：

The wind to his ear brought a voice,（a）
“My brother, you didn’t had ought **ter**！（b）
And what have I done that you think it such fun（c）
To indulge in the pleasure of slaugh**ter**？（b）　　‘The Two Brothersses’

‘ter’ = ‘to’である[7]。俗語あるいは方言で、前置詞・接続詞あるいは副詞として用いられ、それぞれ‘ough*ta*’, ‘ough*ter*’, ‘use*ter*’の中にも含まれていることが分かる（作品は異なるが）。OED における初出は 1867 年なので、Carroll はこの使い方には通暁していたはずである。

次に見られる‘sae’も類似の言語現象と捉えていい：

“And how wad I ken ye loved me, Sir,（a）
That have been sae lang aw**ay**？（b）
And how wad I ken ye loved me, Sir？（a）
Ye never telled me s**ae**.”（b）　　‘The Lang Coorting’

a-b-a-b の詩形で、b-line をうまく押韻させなければならないので‘sae’は自動的に /sei/ と発音されることになる。スコットランド風の詩で、lang = long となる。最終行の‘telled’は面白いことに弱変化動詞の過去形となっている。

次の押韻も留意するに値しよう：

“And certainly you’ve given me（a）
The best of wine and v**ictual** ---（b）
Excuse my violence,” said he,（a）
“But accidents like this, you see,（a）
They put one out a l**ittle**.（b）　　‘Phantasmagoria’

a-b-a-a-b 詩形で、b-line が問題となる。‘victual’ : ‘little’ は一見、不正確韻に見えるが、紛れもなく正確に押韻している。‘victual’ は AF / OF 系の語で、‘vitail(l)e’ という形で中英語では頻用されている。発音は /vittel, vittl/ というふうに綴りとは乖離している。この語の正確な発音を Carroll は子どもに教えていることになる。

次は Carroll が敬愛して止まない同時代の大詩人が脚韻語として出てくる例：

I urged “You're wasting time, you know: (a)
Delay will spoil the venis**on**.” (b)
“My heart is wasted with my woe! (a)
There is no rest --- in Venice, **on** (b)
The Bridge of Sighs!” she quoted low (a)
From Byron and from Tennys**on**. (b) ‘Melancholetta’

a-b-a-b-a-b 詩形で、b-line が問題となる。‘on’ の発音は不変なので、他はそれぞれ /venison/、/tension/ となり、/-sn/ という natives の音とは異なる。また、‘on the Bridge of Sighs’ も明らかに意味的には行跨りになっている。

なお、Carroll は他にも同時代の知名人をしばしば脚韻の位置に持ってくる。

次も視覚韻となっている。Carroll の苦心の跡が伺える：

Forth from the house his sister came, (a)
Her brothers for to s**ee**, (b)
But when she saw that sight of awe, (c)
The tear stood in her **e'e**. (b) ‘The Two Brothers’

「彼女の目に涙が溢れた」の意なので、明らかに e'e = eye である。‘see’ と押韻させるための苦心の語形と言えよう。

次の例は微妙に異なる 3 つの音が押韻していることになる：

There was once a young man of Op**orta**, (a)
Who daily got shorter and sh**orter** (a)
The reason he said (b)
Was the hod on his head, (b)
Which was filled with the heaviest m**ortar**. (a) ‘Limerick III’

a-a-b-b-a 詩形で、a-line が問題となる。/-o-ta/, /o-tə-/, /-o-ta-/ となり、やはり詩的許容範囲内である。内容は実に他愛ないものとなっている。

次に呈示する例はひときわ留意に値するかも知れない：

In scenes as wonderful as if（a）
She'd flitted in a magic skiff（a）
Across the sea to C**alais**:（b）
Be sure this night, in Fancy's feast,（c）
Even till Morning gilds the east,（c）
Laura will dream of **Alice**!（b）　'Laura Isabel Plomer', 6 – 11

文頭の文字を横に並べると固有名詞になる acrostic で、a-a-b-c-c-b という詩形になっている。問題は 'Calais' と 'Alice' がどうして押韻しているかということになる。Calais はドーヴァー海峡を臨む北フランスの地名「カレー」である。片や「アリス」！「アリス」の音は不変なので 'Calais' をいじらなくてはならない。そこでずばり /kælis/ と大胆に読ませたいのかも知れない。こうして正確な押韻が成立する。Carroll 詩全体の中で最も秀逸な言葉遊びの1つと言えるかも知れない。

同一の ACROSTIC の第 1 連と第 3 連は次のようになっている：

LOVE-lighted eyes, that will not start（a）
At frown of rage or m**alice**!（b）
Uplifted brow, undaunted heart（a）
Ready to dine on raspberry-tart（a）
Along with fairy **Alice**!（b）

Laura Isabel Plomer の first name が各行の頭に盛り込んである。Alice がこともあろうに「悪意」（=malice）と押韻しているとは、Carroll も意地悪と言えよう。次にも留意！：

Perchance, as long years onward haste,（a）
Laura will weary of the taste（a）
Of Life's embittered ch**alice**[8]：（b）
May she, in such a woeful hour,（c）
Endued with Memory's Mystic power,（c）
Recall the dreams of **Alice**!（b）

'chalice : Alice' も見事な押韻と言えよう。

次に、押韻で特徴的なのは２語：１語のそれで、しばしば見られる。

先ずは『不思議の国のアリス』第５章に現れる：

‘You are old, said the youth, ‘and your jaws are too weak （a）
For anything tougher than s**uet**;（b）
Yet you finished the goose, with the ***b***ones and the ***b***eak ---（a）
Pray how did you manage to d**o it**? （b）

/-u:it/ で見事に押韻している。なお、‘***b***ones and ***b***eak’ という頭韻も見られる。ここに見られる脚韻と頭韻の実例は英詩の伝統でもある。この型の押韻の例は枚挙に暇がない（‘College Rhymes’ に同一例あり）。

“Nay, nay !” the Don replied, amused,（a）
“You’re talking nonsense , sir ! You kn**ow it** !（b）
Such arguments were never used （a）
By any friend of J**owett**.”（b）　　‘College Rhymes’

ここは固有名詞と２語の押韻の例である。この ‘Jowett’ : ‘know it’ はもう１例見られる（‘The Elections to the Hebdomadal Council’）。
類例を続けると：

He said “A flutter of alarm （a）
Is not unnatural, **is it**? （b）
I really feared you meant some harm:（a）
But, now I see that you are calm,（a）
Let me explain my v**isit**[9]. （b）　　‘Phantasmagolia’

“I’m not so young, Sir,” he replied,（a）
“As you might think. The f**act is**,（b）
In caverns by the water-side,（a）
And other places that I’ve tried,（a）
I’ve had a lot of pr**actice**:（b）　　‘Phantasmagolia’

これは一見、発見し難い例ではなかろうか。

“That narrow window, I expect,（a）

Serves but to let the d**usk in** ---” (b)
But please”, said I, “to recollect (a)
‘Twas fashioned by an architect (a)
Who pinned his faith on R**uskin**!” (b) ‘Phantasmagolia’

Carroll が敬愛して止まなかった Ruskin[10] を ‘dusk in’ と押韻させている！

Centred in the golden breast-p**in**, (a)
He had learnt it all from Rusk**in**. (a) ‘Phantasmagolia’

ここは厳密には 2 語：1 語の押韻ではないが、感覚的にはそうである。

“It’s not in Nursery Rhymes? And yet (a)
I almost think **it is** --- (b)
‘Three little Ghosteses’ were set (a)
‘On posteses’, you know, and ate (a)
Their ‘buttered toast**eses**’. (b) ‘Phantasmagolia’

‘**it is**’ : ‘ toas**teses**’ --- 少し無理があるようだがどうにか押韻している。更にここでは ‘Ghosteses’, ‘posteses’, ‘toasteses’ という同一の語尾形に要注意。

次の例も面白いのではなかろうか：

My Whole is one of those perplexing m**isses**, (b)
Where looks of Youth encourage friendly k**isses**, (b)
And yet where Age is sober fact, and th**is is** (b)
Destruction to such transitory bl**isses**! (b) ‘A Charade’

これは a-a-a-a-b-b-b-b という 8 行 1 連から成る詩で、後半の b-line だけを提示している。押韻の相手から ‘this is’ は明らかに /ðisiz/ と一気に読むことになる。明らかに Carroll は言葉遊びそのものに熱中しているようである。

“Some dialects are objected to --- (a)
For one, the Irish br**ogue is**: (b)
And then, for all you have to do, (a)
One pound a week they offer you, (a)
And find yourself in B**ogies**!” (b) ‘Phantasmagolia’

ここでは‘brogue is’を /brogi:z/ と一気に読む必要がある。類例は続く：

“Why, no,” said he, “perhaps I should （a）
Have stayed another m**inute** --- （b）
But still no Ghost, that’s any good, （a）
Without an introduction would （a）
Have ventured to beg**in it**. （b）　‘Phantasmagolia’

これは他でもときどき見られる押韻で、‘begin it’が‘minute’の発音の仕方を教えていることになる。類似の例を次に：

So with her friend she visited （a）
The sights that it was r**ich in**: （b）
And first of all she popped her head （a）
Inside the Christ Church k**itchen**. （b）　‘Maggie’s Visit to Oxford’

なおここでは‘visited’が‘head’と押韻しているので前者は /vizit**ed**/ となる。更に類例として‘tr**im it**: l**imit**’が見られる（‘Phantasmagoria’（a-b-a-a-b））。

最後に究極の、言うなればウルトラ C 級の押韻の例を呈示したい！：
想像力を逞しくして頂く必要がある：

Yet what are all such gaieties to **me** （a）
Whose thoughts are full of indices and surds? （b）
$X^2 + 7x + 53$ （a）
$= \frac{11}{3}$ （b）　‘Four Riddles’

3 行目と 4 行目は数字になっているので、一見、何のことか分からない人もあろう。しかし、この詩形では後半がちゃんと a-b になっているのである。つまり、53 = fifty-**three** で **me** と押韻している。さらに精巧に練られているのが分数で eleven-th**irds** で s**urds** と押韻している。数学者にして論理学者、Carroll の面目躍如たる一面が表れている！まさしく謎解きを主題とする詩に相応しい言語遊戯と言えよう。

押韻の伝統（中英語時期よりの）を守りつつも一方では破格の押韻も敢えて試み、革新を狙っているようにも見える。革新＝伝統からの「逸脱」と言ってもいいかも知れない。その逸脱の「妙」を見てきたつもりである。

注：

1）この詩の第１連に見られる ‘glied’, ‘plied’, ‘guide’ という押韻は見事というほかない、と Selwyn Goodacre は言う（*Elucidating Alice*, p.7）。また、Martin Gardner は次のように言っている：「最初の連に３回も出てくる ‘little’ に注意を！アリスの姓の Liddell（‘little’ と押韻させるために /litl/ と発音する）を意識しているのかも知れない（*More Annotated Alice*, p.5）。

2）R.D. Sutherland はこの詩（855）を ‘an imitation of “late Middle English” と言っている（*Language and Lewis Carroll*, p.49）。

3）Michio Masui, *The Structure of Rime Words*, p.101

4）Martin Gardner は「この詩はキャロルの最上の詩の１つで『鑑の国のアリス』の序文を貫いて流れている冬と死のテーマの響きがある」と述べている（*The Annotated Alice,* p.345）。

5）Geoffrey Chaucer: ‘The Tale of Melibee’ line 7 に初出の語で、‘burlesque poetry of irregular rhythm; bad or trivial verse’ と OED は語釈している。

6）see OED: ‘again’ --- 17 – 19c. in poet. *agen* --- とあり、これは ‘ayen’ と ‘again’ との混合で、たとえ ‘again’ と綴られても文学作品では /agen/ と通常は発音された、とあり、多くの引用例あり。

7）see OED: ‘ter’、発音は /tə/ となる。

8）キリスト教の言葉で「聖杯」の意。

9）COD, POD: ‘rhyme’ の項を引くと、この ‘visit’ は ‘is it’ と押韻する、とある。

10）John ~（1819-1900）: Oxford 大学美術史教授でアリスに絵を教える！

使用テキスト、参考書、辞典

Alexander Woollcott & John Tenniel, *The Complete Works of Lewis Carroll,* Penguin Books, 1988

Gillian Beer, *Lewis Carroll: Jabberwocky and Other Nonsenses* ---Collected Poems, Penguin Books, 2013

Hugh Haughton, *Lewis Carroll: Alice's Adventures in Wonderland* and *Through the Looking-Glass*, The Centenary Edition, Penguin Books, 1998

Martin Gardner, *The Annotated Alice*, Penguin Books, 1970

Martin Gardner, *More Annotated Alice*, Random House, New York, 1990

R. D. Sutherland, *Language and Lewis Carroll*, Mouton, 1970

Selwyn Goodacre, *Elucidating Alice*, Evertype, Ireland, 2015

Michio Masui, *The Structure of Chaucer's Rime Words*, Kenkyusha, 1964

Lewis Carroll Studies, No.1, The Lewis Carroll Society of Japan, 1999

The Oxford English Dictionary（OED[2]）, Oxford University Press, 1989

The Concise Oxford Dictionary（COD[5]）, Oxford University Press, 1964

The Pocket Oxford Dictionary（POD[5]）, Oxford University Press, 1969